



写真1 流氷群に包囲されて救助を求めらるる漁船

解

(なお詳細は本紙中の「流氷と海難」を参照されたい)

(写真1) 1957年3月17日稚内を出港、沿岸水路 (shore lead) を利用して網走にむけ回航中の第2照丸 (12トン3名乗組) は、雄武港 NE1 マイル沖で急速に移動する氷丘氷盤 (Hummocked ice-floe) 群を避航できず、水域内に封鎖されて航行不能に陥った。写真は現場をヘリコプターから撮影したもので、船上の人影から氷盤の大きさを推定されたい。氷盤は厚さ 50cm 以上の板氷 (ice-cake) が雑然と累積してできたもので、その海面上の高さは 3m 内外。当時船は流氷に圧流されてモイネッ岬 (左上の三角形の黒い部分) から 1000m の地点にあり、水域はややゆるみに見せはじめたところである。

(日 時) 1957年3月24日10時20分

(場 所) 北海道雄武港外1000mの地点

(高 度) 500フィート

(撮影機) 第一管区海上保安本部所属ヘリコプター (153号機)



写真2 観測飛行中の流氷観測機

説

(写真2) 戦後待望久しかった流氷飛行機観測は、防衛庁の協力をえて1957年1月から札幌管区・函館海洋両気象台の手でようやく再開されるにいたった。写真は知床半島北岸上空を飛行中の観測機 (セスナL-19) を僚機から撮影したもので、後部座席では観測員が機体に取り付けたカメラで傾斜写真測量中である。下方海面には平坦氷盤 (level ice-floe) が密集しているが、ごく初期のもので厚さは 50cm 前後、個々の氷盤の直径は海岸の人家からおおして 40~50m と思われる。

(日 時) 1957年2月3日11時00分

(場 所) 北海道知床半島遠音別 (オンネベツ) 沖合 5 マイル

(高 度) 4000フィート

(撮影機) 陸上自衛隊第5航空所属連絡機 (02号機)